

Title	Al kagen : hele kagen : den hele kage
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.45-p.51
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81220
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Al kagen : hele kagen : den hele kage

新 谷 俊 裕

Toshihiro SHINTANI

Det er ikke altid let for en udlænding at finde ud af, hvornår man skal bruge *al/alt*, og hvornår *hel/helt/hele*. Når der er tale om et substantiv i ental, siges det, at *al/alt* bruges ved utællelige substantiver, mens *hel/helt/hele* bruges ved tællelige substantiver. Der er dog nogle substantiver, ved hvilke både *al/alt* og *hel/helt/hele* kan forekomme: fx. *kage*, *fritid*. *Kage* kan jo være både utællelig og tællelig og kan derfor optræde med både *al* og *hel(e)*:

Peter spiste al kagen.

Peter spiste hele kagen.

Ordet *fritid* er altid utælleligt og forventes derfor kun at optræde med *al*:

Peter bruger al sin fritid til fiskeri.

Fritid kan imidlertid optræde med *hele*, når den er afgrænset af en fast ramme:

Peter brugte hele sin fritid til at reparere huset i weekenden.

Ja, ved nogle substantiver kan brugen af *al/alt* eller *hel/helt/hele* afhænge af, hvordan man opfatter ting.

Den bestemte brug af *hele* kan være problematisk, for der findes to typer, nemlig hele-kagen-typen og den-hele-kage-typen. Mange grammatikere siger, at de to typer har samme betydning, og nogle grammatikere siger, at den-hele-kage-typen stilistisk set er gammeldags. Er det mon tilfældet? De lange diskussioner, jeg havde med en indfødt dansker, har ført til følgende:

Begge typer betegner objektivt set det samme, men den-hele-kage-typen har talerens subjektive vurdering med sig, så sætning (a) for eksempel kan omskrives som følgende:

(a) Peter spiste den hele kage. → (b) Peter spiste hele kagen!

eller → (c) Peter spiste hele kagen, og det var meget!

Hel/helt/hele kan desuden bestemmende bruges i modsætning til 1/2, 1/3, 1/4 eller andre brøkdele, så sætning (d) kan omskrives som følgende:

(d) Peter spiste den hele kage. → (e) Peter spiste den kage, der var hel.

Det vil sige, at *den hele kage* kan have to forskellige betydninger (i (a) og (d)).

1. 序

現代デンマーク語では〈すべての〉を意味する語に *al/alt/alle* と *hel/helt/hele* がある。前者は名詞的にも形容詞的にも用いられる代名詞で、名詞的に用いられる場合、*alt* が〈すべてのこと・物〉を表し *alting* と同義であり、*alle* が〈すべての人々〉を表すのは周知のことである。これらが形容詞的に用いられる場合は、ふつうの形容詞とは異なり、形態論の観点からいうと、未知形・既知形による変化はせず、共性名詞の単数形とは常に *al* が共起し、中性名詞の単数形とは *alt* が、共性・中性名詞の複数形とは *alle* が共起する。統語論の観点からみると、*al/alt/alle* は定冠詞等によって限定された名詞の前に置かれる。このことを、一般的な形容詞 *god*〈良い〉を例にして見てみると以下のようになる：

<i>god mælk : den gode mælk</i> 〈良いミルク〉	↔	<i>al mælk : al mælken</i> 〈すべてのミルク〉
<i>godt vand : det gode vand</i> 〈良い水〉	↔	<i>alt vand : alt vandet</i> 〈すべての水〉
<i>gode elever : de gode elever</i>	↔	<i>alle elever : alle eleverne</i>
〈良い生徒たち〉		〈すべての生徒たち〉

一方、*hel/helt/hele* は形容詞であり、形態的には他の形容詞とまったく同様に未知形・既知形により変化する。統語的には他の形容詞と同様か (*en hel dag : den hele dag*, *et helt døgn : det hele døgn*, *tre hele dage*; *dag*〈日〉, *døgn*〈昼夜, 1日24時間〉), あるいは代名詞 *al/alt/alle* と同様である (*hele dagen*, *hele døgn*)。

筆者の経験から見て、日本人のデンマーク語学習者にとって複数名詞と結びつく *alle* の用法が問題となることはまずないと思えるが、単数名詞と結びつく *al/alt* は *hel/helt/hele* との関連において問題となることがあるようである。外国人向けの文法書には、*al/alt* は不可算名詞（の単数形）と共起し、*hel/helt/hele* は可算名詞の単数形と共起すると、簡単に述べているものがあるが (Afzelius *et al.* : 15, 山野辺 : 53f.), それでは、次の例文(1), (2)はどう解釈すべきであろうか：

(1) Peter spiste *al* kagen. 〈P は～を食べた〉

(2) Peter spiste *hele* kagen.

また、*hele* が定冠詞等によって限定された名詞と結びつく場合には、*hele* が定冠詞等によって限定された名詞の前に来る *hele dagen* タイプのものと、そうでない *den hele dag* タイプのものがある。両タイプは同義であるとする文法書や (Hansen: 183, Lomholt: 69, 山野辺 : 53f.), 両者は同義であるが *den hele dag* タイプの方は古めかしいスタイルであるとする文法書などがあるが (Jones & Gade: 33), それでは上の例文(2)は次の例文(3)と、スタイル（の差があるとすれば、そ）の点を除け

ば、同義なのであろうか：

(3) Peter spiste den hele kage.

本稿では、al/alt, hel/helt/hele の意味・用法を整理しつつ、上記の二点を考察する。

2. 名詞の単数形との係わりにおける al/alt と hel/helt/hele の意味・用法

前節末で触れたように、本稿では名詞の単数形との係わりにおける、al/alt と hel/helt/hele との意味・用法の相違を中心に扱うが、この場合の hele とは、単数・既知形であるのは言うまでもない。

ODS には al/alt や hel/helt/hele の様々な意味・用法が載っており、そこには古い意味・用法もある。また両者の意味・用法がオーバーラップしている場合も多々あり、今日（今世紀初頭の ODS 編集当時）では、どちらか一方の使用が勧められる旨の注意書きが見られる。そのような古い意味・用法を除くと、現代デンマーク語における al/alt と hel/helt/hele の意味・用法は次のようである。

2.1. al/alt の意味・用法

al/alt には概して次の三つの意味がある：(a) 総体、全体、総量、最大限：〈すべての、(あらゆる)〉、(b) 多数の個々の概念を一つの統一体へと総計すること：〈どの～もみな、ことごとく、(あらゆる)〉、(c) 強め；高い／最高の程度・量：〈あらん限りの、最高の、最大の、(あらゆる)〉。

al/alt は次のような不可算名詞（の単数形）や指示代名詞（の単数形）と共に用いられる（cf. Mikkelsen: 316f.）。

(i) 集合名詞と共に：この場合、al/alt には(a)の意味がある：alt kvæg〈すべての畜牛〉

(4) Alt hans gode tøj blev ødelagt.

〈彼の良い服全部が駄目になった〉

(ii) 物質名詞と共に：この場合、al/alt には(a)の意味がある：al luft〈すべての空気〉、alt kødet

〈その肉すべて〉

(5) Flasken væltede, og al mælken løb ud over gulvet.

〈そのビンが倒れて、ミルクは全部床にこぼれた〉

(6) Al maden blev bragt udefra.

〈その食べ物はずべて外から持ち込まれた〉

(7) Al den gamle maling måtte skræbes af, før døren kunne males.

〈そのドアにペンキを塗るには、まず古いペンキを全部こそげ取らねばならなかった〉

(iii) 抽象名詞と共に：この場合、al/alt には(b)と(c)の意味がある：af al kraft〈全力で〉、i al

venlighed〈本当に親切に〉, uden al tvivl〈なんらの疑いもなく〉

- (8) Han havde al mulig grund til at ærgre sig.

〈彼には腹を立てる理由が十分あった〉

- (9) Al færdsel med motorkøretøjer forbudt.

〈自動車による, いかなる通行も禁止〉

- (10) Al brug af åben ild er strengt forbudt.

〈いかなるたき火も厳禁〉

- (11) Til alt held havde han tegnet en forsikring, så...

〈まったく幸運にも, 彼は保険をかけていた。そこで…〉

- (12) Han ærgrede sig over al den ulejlighed, han havde på grund af tyveriet.

〈彼は, 盗難のために被った面倒にことごとく腹を立てた〉

- (iv) 指示代名詞と共に: この場合, al/alt には(a)の意味がある: alt det〈それすべて〉

- (13) Det bliver spændende at høre om alt det, han har oplevet.

〈彼が経験したことの全部について聞くのは面白くなる〉

2.2. hel/helt/hele の意味・用法

hel/helt/hele には, 〈無傷の, 壊れていない〉(例: en hel kop〈壊れていないカップ〉) とか, 〈純粋な, 混ざり気のない〉(例: det er af hel sølv〈それは純銀製だ〉) とかいった質的意味を表す場合と, 一方, 量的意味を表す場合がある。hel/helt/hele と al/alt との関係を扱う本稿では, この質的意味は詳しく扱わない。

2.2.1. hel/helt/hele の量的意味とその用法

hel/helt/hele は可算名詞の単数形と結びつき, (より小さな部分・要素からなりたっている対象の) 欠けたところのない全体を表す:

- (14) Hent lige en hel jordbærkage hos bageren!

〈ちょっとパン屋に行って, ストロベリーケーキをまるごと買っておいで〉

- (15) Man må ikke spise noget som helst i et helt døgn.

〈まる一昼夜何も食べてはいけません〉

上記の例は, hel/helt が不定の名詞と結びついた場合であるが, これらが定冠詞等に限定された名詞と結びつく場合には, hele kagen タイプと den hele kage タイプがあることはすでに第一節で触れた。文法書や辞書の中には, hele kagen タイプが唯一可能なタイプであるという印象を与えているものがあるが (Afzelius *et al.*: 15, DDO: 162, DER: 198f., DES: 523f.), 少なくともデンマーク語に関して言えば, これは明らかに誤りである。ただ, hele kagen タイプが現代デンマーク語でふつうに見られるタイプであるとする文法書もあり (Jones & Gade: 33), ODS (bd. 7. sp. 1065f.) も,

en hel kage に対するふつうの既知形は hele kagen タイプであるとする：

- (16) Man behøver ikke betale hele beløbet på en gang. 〈全額を一度に払う必要はない〉
- (17) Hele hans plan slog fejl. 〈彼の全計画は失敗した〉
- (18) Hele byen var fuld af turister. 〈町中が観光客であふれていた〉
- (19) Han håbede af hele sit hjerte, at de ville have heldet med sig.
〈彼らが幸運であるように、彼は心から望んだ〉

一方, den hele kage タイプは, 二三の文法書によれば, 古い言い方であるにせよ, hele kagen タイプと同義であるとなっている(山野辺: 53f.). 本当にそうであろうか?

筆者が母語話者に確かめた限りでは, 次の(20)は(21)とはまったく同義であるというわけではない。

- (20) Han lå på stranden hele dagen. 〈彼は一日中浜辺に寝そべっていた〉
- (21) Han lå på stranden den hele dag.

つまり, (21)の方は, 話し手の個人的評価が入り：

- (21) Han lå på stranden den hele dag.
 ÷(22) Han lå på stranden hele dagen! 〈彼は一日中 (!) 浜辺に寝そべっていた〉
 ÷(23) Han lå på stranden hele dagen, og det var meget!
 〈彼は一日中浜辺に寝そべっていたけど, 本当に長い時間だよ!〉

といった, 意味合いになり, 客観的なレポートなどでは用いられることは, まずない。

2.2.2. hel/helt/hele の量/質的意味とその用法

hel/helt/hele には, 前節でみた〈欠けたところのない〉という量的意味と同時に, ある物の半分, 三分の一, 五分の一とか, 他の部分との対比において, 〈(部分に) 分けていない, まるのままの, まるごとの〉という意味を表す：

- (24) Drengen praler af at kunne have et helt æble i munden.
 〈その男の子は, りんごまるまま一個を口に入れることができると, 自慢している〉
- (25) Jeg sagde, du skulle give mig den hele jordbærkage, og ikke den halve.
 〈そのまるのままのストロベリーケーキをちょうだい, て言ったでしょう。その半分のって言ったんじゃないわよ〉

この hel/helt/hele の意味と, 前節の hel/helt/hele の意味の相違は, 日本語訳からは十分明瞭であるとは言えないかも知れない。そこで少し説明すると, § 2.2.1. の(14)の en hel jordbærkage (hos bageren) では, 話し手はストロベリーケーキの一個まるままのことを考えている。しかし, その場合, ケーキにナイフを入れて部分に分けているかどうかということは, ぜんぜん問題にしない。つまり, ケーキがまるまる一個分あれば良いということである。それに対して, § 2.2.2. の場合には, 半分とか三分の一とか五分の一など, より小さな部分に分けているものとの対立において, あるいはさまざまな(何分の一という)大きさのものの中から小さな部分に分けていない,

まるごとのリンゴ一個 (et helt æble) や、まるごとのストロベリーケーキ一個を選び出していることができる。すなわち § 2.2.2. では hel/helt/hele は制限的に用いられており、制限的關係節により次のように書き換えることができる：

(24) Drengen praler af at kunne have et helt æble i munden.

→ (26) Drengen praler af at kunne have et æble, der er helt, ...

(25) Jeg sagde, du skulle give mig den hele jordbærkage, ...

→ (27) Jeg sagde, du skul give mig den jordbærkage, der var hel, ...

ところで、これまでに al/alt と hel/helt/hele の意味・用法を見てきたが、統語論的特徴について触れておく必要がある。al/alt と前節 § 2.2.1. までに見た hel/helt/hele は、述語的形容詞として用いられることは決してなく、常に限定的形容詞としてのみ用いられる。一方、§ 2.2.2. で扱われている hel/helt/hele は、限定的形容詞としても、述語的形容詞としても用いられることは、(24), (25), (26), (27) の例から明らかである。

3. む す び

前節で単数名詞との係わりにおける al/alt と hel/helt/hele の関係を見てきた。前者が不可算名詞と結びつき、後者が可算名詞と結びつくのが原則であると言えよう。ただ、名詞の中には、kage〈ケーキ〉や fritid〈暇、自由な時間〉などのように、al/alt と hel/helt/hele の両者と結びつくことができるものがある。

Kage は、数を問題にしない場合、つまり、水などと同様に物質としてみなされる場合は、不可算名詞として機能し al と結びつく：

(1) Peter spiste al kagen.

一方、数を問題にする場合は、一般の可算名詞として機能し hel(e) と結びつく：

(2) Peter spiste hele kagen.

それに対して、fritid は常に不可算名詞である。したがって、常に al と結びつくことが予想される：

(28) Peter bruger al sin fritid til fiskeri. 〈P は余暇全部を釣りに使う〉

しかし、fritid が一定の枠に入れられて特定化される場合には、hele と共起することが可能である：

(29) Peter brugte hele sin fritid til at reparere huset i weekenden.

〈P はこの週末に家の修繕に余暇の全部を使った〉

これらの例からもわかるように、ある名詞が可算名詞であるか、不可算名詞であるかは、時には話し手の物の見方に左右されるものである。

Hele kagen タイプと den hele kage タイプの違いは § 2.2.1. から明らかであるが、den hele kage タイプでは、話し手の個人的評価が含まれる。そのため、den hele kage タイプの表現は、この意味

においては、客観的な内容が要求される場での使用を避けるべきであると言える。外国人は用いない方が無難と言えよう。

Den hele kage タイプには、§ 2.2.2. で見たように、さらに、半分とか三分の一とかに対しての〈まるままの、まるごとの〉という意味がある。この後者の意味を表す場合は、den hele kage タイプの表現は、何ら、その使用を避けるべき理由がないのは、当然のことである。

以上、本稿では、al/alt と hel/helt/hele を単数名詞との係わりにおいて扱った。網羅的というには程遠いが、筆者が常日頃から重要と考えているポイントは押さえたつもりである。

参 考 文 献

- Afzelius, Otto *et al.* 1986. *Dansk grammatik for udlændinge*, specialpædagogisk forlag (tidligere udgaver Dansk Flygtningehjælps sprogskole).
- Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk II*, København.
- Jones, W. Glyn & Gade, Kirsten. 1985. *Danish A Grammar*, 2. opl. Copenhagen.
- Lomholt, Jørgen. 1982. *Le Danois Contemporain*, Copenhagen.
- Mikkelsen, Kr. 1911. *Dansk ordføjningslære*, København.
- 山野辺五十鈴（編著）1986. 『自習デンマーク語文法』, 東京。

辞 書

- DDO=Dissing, Børge og Helles, Sigrid. 1988. *Dansk-dansk ordbog*. 5. udg. København.
- DER=Axelsen, Jens. 1984. *Dansk-engelsk ordbog*. (Gyldendals røde ordbøger) 9. udg. København.
- DES=Vinterberg, Hermann og Bodelsen, C. A. 1966. *Dansk-engelsk ordbog*. (Gyldendals store ordbøger) 1. bd. København.
- NDO=Oxenvad, E. (udg.). 1982. *Nudansk ordbog*. 13. udg. København.
- ODS=Det danske sprog- og litteraturselskab (udg.). *Ordbog over det danske sprog*. København.
1. bd. 1918-1919.
7. bd. 1925.

(1988年11月)